

久路土のいぼ神様

むかしむかし、小倉の城にこの様があったそう。ある日、このこの様のおでこに、大きないぼができてしもうてのう。このいぼが、いとつていとつてどうにもたまらん。

「あいたたた…。このいぼのいたさときたらどうだ。夜もねられんし、医者の薬もきかぬ。だれかよ
いちえはないものか。」

すると、家来の一人が、

「との。何でも、豊前の久路土というところに、ありがたいほとけ様があるそうです。めずらしいこ

とには、このほとけ様にはふしぎな力があって、よくよくおがんで、ほとけ様のお水をいただきいぼにぬると、どのようないぼもたちどころに取れるというのでございます。土地の者は『いぼ神様』と呼んでいるそうです。」

と、言ったそう。との様は、

「おお、それはよいことを教えてくれた。ただ今すぐに、そのいぼ神様とやらにまいり、このいぼを取っていただくようおがもうぞ。」

と言ったが、べつの家来は、

「との、そのような話はしんじられませぬ。本当かどうかもわから



ぬことをしんじ久路土のような遠いところに行かれて、もしものことがあったらどうします。」と大反対したそうじゃ。そこでこの様は、家来の一人に命じて、自分の代わりにいぼ神様にまいりに行かせることにした。

この家来は、久路土までの道のりを一生けんめい歩き、ようやくいぼ神様にたどり着き、

「この様のいぼが取れますように。」

と心をこめておがんだ。そして、そのことを少しでも早くこの様にお知らせしようと、とんで小倉に帰ったそうな。ところがあまりに急いだために、この家来、お水をいただいでくることをすっかりわすれていた。お城に着いてそのことに気づいたけれど、もうおそい。さあ大へん。

「うち首じゃ……。」

とかくごを決めたそうな。ところがこの様はにこにこ顔で、

「ようもどつた。ごくろうであつた。」

と、家来をむかえた。よく見ると、この様のおでこにあつたいぼがきれいにとれておる。そして、

「いや、それがふしぎなこと。おまえがしろをたち、久路土に着いたころのことじゃ。あれほどいとつてたまらず、けつして取



れなかつたいぼが、ふと気づくときれいに取れておつたのじゃ。それもこれも、いぼ神様のおかげじゃ。」

と、大よろこび。

ところが、いぼ神様などしんじられぬと言っておつた家来の鼻はなに、何と大きいいぼができておるではないか。この家来、いぼがいとうてたまらずなみだが出るほどなんじゃが、意地いじをはつていぼ神様にまいろうとせんじやつた。みんなのすすめを聞きかず、医者どんに行つたけれど、いつころになおらん。それどころか、薬にかぶれてますますひどくなるばかり。しまいには、鼻が二つふたできたようなひどい顔になつてしもうた。こうなつてはたまらん。ついに決心けっしんし、本当にいぼが取れるのかとうたがいながらも、いぼ神様にまいりに行ったそ
うな。するとどうじやろう。いぼ神様に手てを合あわせおがんだとたん、いぼがころりと取れたそうな。この家来は、なみだを流ながしてよろこんだ。

久路土のいぼ神様には、今も、まいりにくる人ひとが後あとをたたないといふことじゃ。

(末吉育子)



久路土のいぼ神様